

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成26年 2月 第156号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

透明感が伝える命のメッセージ



『パムッカレ石灰棚』(白坂介明氏作・油絵100号)

『せいりょう園自愛の家さくら』玄関に100号の絵が飾ってあります。

中学校時代の恩師である白坂介明先生が、2009年6月にご夫婦で旅行されたトルコのイスタンブールや世界遺産カッパドキア・パムッカレなどの風景を2～3年かけて仕上げられた作品の一つです。2013年11月12日に先生のご自宅にお伺いして頂いて来ました。『石灰

棚を満たす水の透明感を出すのに苦労した』と話されたのが強く印象に残っています。そして11月19日、先生は満77歳で天国に旅立たれたのでした。

約3年前に肺がんと診断されながらも、自らの絵を画く事と絵画教室で教える事を生き甲斐として、濃厚な治療を受けずに奥様と2人で穏やかに過ごされていたのでした。お伺いした時も、酸素吸入のチューブを着けて車いすに座った姿ながらも、やつれた様子も見せず、どこか楽しげに説明して下さいました。

『石灰岩の白さと青い水の明るい透明感』を画く為に、何度も何度も塗直して仕上げた画面には、老いと病と共存して生きる先生の力強い生命力と、絵を観る我々への深いメッセージが込められているように感じます。

2013年2月に満77歳を迎え、5月に『喜寿と60年描き続けて』の記念展覧会を開き、11月9日にキリスト教の洗礼を受け、先に受洗されている奥様と2人のご子息を同じ天国で迎えるべく、19日に旅立たれたのでした。

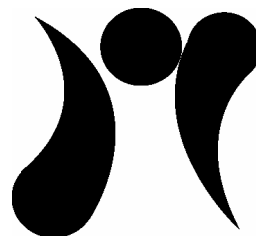
『お見事』な締め括り、と感服致します。

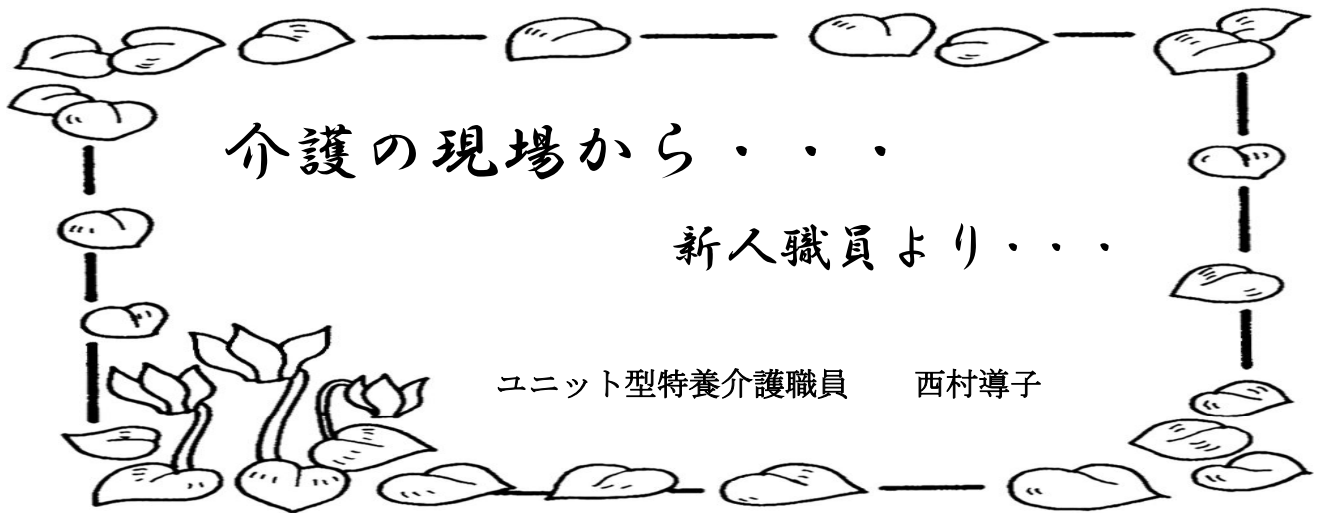
絵は大切に飾らせて頂きます。

『合掌』

加古川市立中部中学校昭和38年度卒業生

せいりょう園 渋谷 哲





介護の現場から・・・

新人職員より・・・

ユニット型特養介護職員 西村導子

せいりょう園のユニット型特養で働き始め、もう間もなく一年が経とうとしています。最初は戸惑うことも多く、やっていけるのかという気持ちで不安も多くありました。

しかし、先輩方のご指導もあり、徐々にですが仕事も覚えていくうちに、とてもやりがいのある仕事だと感じるようになりました。失敗したことや、ご迷惑をおかけした事も多くあります。その中で学ぶことも多くあったと感じております。

入居者の皮膚は非常に弱い為、入浴時に身体を洗う際には細心の注意をしますが、怪我をさせてしまったり、飲食の際に喉を詰まらせてしまった場合には、どうしたら良いか分からず焦るばかりで、その都度先輩方にフォローして頂き、これもいい勉強だからと励まされながら何とか乗り切りました。

なかでも看取りに関しては、せいりょう園が力を入れているところでもあります。初めて作事中に亡くなられた方を目の当たりにした時には、号泣してしまい、冷静に受け止めることが出来ませんでした。

私が働き出してから多くの方が亡くなられました。ターミナル診断を受けた入居者と接することが怖くもありました。しかし少しずつ、ターミナル診断を受けたご家族の方々と接したり、入居者と接するうちに、精一杯ご自身の人生を生きていらっしゃるのだと感じるようになっていきました。

多くの方々を見送っていく中で、初めて夜勤の時に急変して亡くなられた方がおられました。まだ身体は温かく、直ぐには信じられませんでした。何をどうすれば良いのか戸惑うばかりの中、先輩が冷静に指示を出して下さり、一生懸命落ち着こうと努めました。私はなんと無力なのかと感じながらも、感傷的になっている場合ではない。自分ができることをしっかりやろうと気持ちを切り替え、亡くなられた方のエンゼルケアをさせて頂きました。

その方はとても穏やかな表情をしておられ、苦しむことなくご自身の人生の幕を降ろされたのだと感じました。その中には、もう怖いという思いはありませんでした。ご家族の方々ともお話させて頂き、苦しまずに死ねて良かったとおっしゃられる言葉を聞き、せいりょう園の素晴らしさを感じると共に、先輩職員の方々のプロとしての姿勢を見習っていきたく改めて感じました。

利用者の方々とも少しずつではありますが、信頼関係を築けていけているように感じています。まだまだ分からない事も多く、未熟なところも多々ありますが、もっと利用者の方々とも信頼関係を築いていけるよう、簡単ではありませんが努力して参りたいと思います。



Nさんの看取りについて

グループホーム（ユニット2）
介護職員 丸本照美

Nさんは平成23年11月15日に、せいりょう園グループホームに入所されました。入所当時からターミナル段階の方だったので、職員の対応もターミナルに向けての介護が必要であると言われました。食事は、ミキサー食でしたが、当初は殆ど食べることができない状態でした。

しかし日が経つにつれて少しずつミキサー食が食べられるようになり、ホールで過ごす時間も増えました。しばらく経過すると1日の大半をホールで他の入居者の方々と過ごすようになりました。ホール内で自由に自分の居場所を見つけて、同テーブルの方々に様々な提案をされるようになり、いつの間にかNさんが話題の中心に居ました。

Nさんは、小学校の教諭をされていたのも要因の1つなのかもしれませんが、プライドが高く、自分の意志を強く持ち、ホールで過ごす際には自分の時計と日記帳を置き、その都度あった出来事を書いて、自分らしく生活を送っていました。Nさんの口癖は「幸せ“N”でございます。」と毎回言っていた事を思い出します。歌が大好きなNさんは、よく口ずさみ、毎週金曜日には、藤城先生が開催する「ピアノ教室」に参加され、その時の出来事を日記に書き込み、参加後は「今日は〇〇がありましたね。楽しかったね」等と入居者の皆さんに話していました。皆と歌を歌う際には先頭に立って歌っていました。大好きな童謡が流れると特に大きな声で歌っていました。食事は、ミキサー食→きざみ食→普通食へと変わり、主食も粥→ご飯を食すようになりました。排泄に関しては、入居当時は寝たきりの状態でオムツ交換でしたが、暫く経過すると自らトイレに行くようになりました。グループホームでの暮らしの中で自分の居場所を見つけられたのか、日々の本人の状態も良くなり、自分らしく生き活きとした生活を送るようになりました。ご家族も面会に来る度に、良くなっているNさんの姿を見て、驚かれたり喜ばれたりした事を思い出します。

そんなNさんが平成25年7月26日に肺炎で入院。入院中は「グループホームに帰りたい。」と言っていたそうです。約1ヵ月後に退院。退院後は、自室のベッドで過ごす事が多くなりました。発熱や身体の痒みも強く、本人にとっては辛い日々だったかもしれません。そんな状態でも自分の想いや意志を強く持ち「いや。」「わかりました。」「痛い。」「そんな事せんといて。」等、想いを口に出していました。段々と身体が硬くなり、衣服の着替えの際には痛みが伴うようになりました。職員が何故着替えるのかを説明し、本人が納得すると痛いのを我慢して協力して頂いた事を思い出します。平成25年12月頃より、食事量が減り、口の中に痰が溜まりやすくなってきました。再度ターミナルの時期となった時、家族は、「今後は、入院しないでグループホームで最期を迎えたい。家族として出来るだけの事はします。」と言われました。キーパーソンのご子息は、時間がある際には食事を食べさせたり、温かいタオルで顔を拭いたりと身の回りの世話をし、母との共有時間を過ごしていました。食事量が減った時でも、ご子息の食事介助の時は全部食べていました。きっと愛情も加わりNさんにとっては美味しかったのだと思います。

平成26年1月に入ってからNさんの状態は悪くなっていくが、食事は少ないながらも食べて「まだ元気です。」「身体が痒くて痛いですが、頑張っています。」と言い、生きていく力強さと頑張っている姿を職員は見せてもらいました。職員の中では、ターミナル期の未経験者が何人か居り、口の中に痰が泡のように溢れ出るNさんを見て、恐さの方が先に立ち、痰を取り除く対応が出来ない職員もいました。しかし、先輩職員の対応する姿を見て、少しずつ出来るようになり、痰が溢れ出る時は、

仰向けではなく、しっかりと身体を横に向ける。右足のかかとに床ずれが出来た際には、訪問看護師の指示の下、職員皆で工夫してクッションを置く。Nさんの身体の痒みがひどく皮膚の乾燥が強いときには、処方された軟膏を塗るのは勿論ですが、家族が購入した軟膏を塗りました。本人が楽に過ごす事が出来るように、そして家族の想いを汲む事の大切さを学びました。夜間帯で発熱が多く見られ、その都度状態の変化を職員に細かく申し送り、家族・主治医・訪問看護師との連携をとる事の大切さも学びました。

日中Nさんが比較的元気な時に食事を少し多く食べることが出来ても、夜間に多量の痰で苦しんだ事を聞いたとき、私は本当に食べて貰って良かったのか？と思い悩み、職員間で、その話題について話し合い、「本人に食べたい気持ちがあったので、気持ちを優先して良かったのでは？」や、でも「もう少し・・・何か・・・？」と職員間で話し合う機会が持てました。ターミナル期でもNさんの意識はしっかりありました。話の内容も理解していたので、介助の際には、しっかりと声掛けして、納得してもらおうと拒否なく介助が出来ました。声掛けが大切であることは分かっていたのですが、先輩の声掛けする姿を見て自分は声掛けが不十分であったと再認識する事がありました。

平成26年1月12日、沢山の家族に看取られてNさんは息を引き取りました。看取りの期間は、恐いものではなく、最期のステージを迎えるお手伝いをする事が、介護職としての仕事であることをNさんには教えてもらったと思います。

最期の最期まで自分の意志を持ち、プライド高く、強く生きる姿を我々に見せてくれたNさんには、涙でお別れするより、「お疲れ様でした。」という言葉が合うように感じました。

【せいりょう園空き情報 平成26年2月14日現在】

- ① ケアハウス：1室（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ②グループホーム：空きなし
- ③グループホームまどか：空きなし
- ④サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：2室
- ⑤サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

【他ケアハウス空き情報】

- | | | | |
|------------|---------|------------|---------|
| ○恵泉 | ：1人部屋若干 | ○第二ケアハウス恵泉 | ：1人部屋若干 |
| | ：2人部屋若干 | ○青山苑 | ：1人部屋3室 |
| ○清華苑湘パライフ | ：1人部屋3室 | | ：2人部屋2室 |
| ○ネバーランド | ：2人部屋3室 | ○あさなぎ | ：1人部屋2室 |
| | | ○キャッシル真和 | ：1人部屋1室 |
| ○サリットひまわり園 | ：1人部屋1室 | ○香楽園 | ：1人部屋1室 |

[問合せ先] せいりょう園 Tel.(079)421-7156/(079)424-3433

せいりょう園待機者状況 <平成26年2月12日現在>

- 入所判定済み者 398人（グループの内）
 - Iグループ…142名 IIグループ…150名 IIIグループ…106名
- 入所判定済み者の現在状況
 - 在宅154名/特別養護老人ホーム入所中13名/ケアハウス入居中3名
 - 老人保健施設入所中95名/障害者施設2名/医療機関入院中114名
 - グループホーム入居中12名/所在不明5名
- 辞退その他 他施設入所1名/辞退3名/死去6名

テーマ「せいりょう園で行っている看取りケア」



せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

亡くなる方の8割が病院で最期を迎える今、せいりょう園の特別養護老人ホームでは、平成24年から平成25年の2年間で亡くなった方は、34名になります。この34名は、すべて施設内で看取りを行っています。最期のときを救急搬送せずに、必要以上の医療を使わず自然な形で看取りを行っていく中で、安らかな最期を迎えることが経験として分かってきました。又、グループホームやケアハウス、サービス付き高齢者住宅では、往診医を中心とした多職種専門職と連携を行いながら、せいりょう園というコミュニティの中で多くの方を看取らせていただいています。

○申込があった時からが看取りのはじまり

一般に老人ホームのイメージと実際の生活には大きなギャップがあると感じています。入所申込の相談を受けている中でも、安心と安全を求め施設入所を希望されている方がいらっしゃいます。施設内での転倒、転落、もしくは食事時の誤嚥などあってはならないこととして考えている方もいらっしゃいます。しかしながら、ご本人の出来ることを尊重するという事は、同時にご本人の負うべきリスクについても一生活者としてご本人に引き受けていただきたいと考えています。出来ていたことが出来なくなる、という老いの自然現象の中で、ご自宅で起こり得ることについては、生活の場所であるせいりょう園でも起こり得ることである、としてご本人ご家族には説明しています。

ご本人の「死」についても同じことがいえます。老人ホームに入所すれば、病気が治る、長生きできると考えている方もいらっしゃいますが、高齢である以上「死」はそう遠くない未来に起こる事実として想定されます。その時がいつ訪れるのか分からないことなので、申込のあった時にご本人の最期をどう考えているのかをお聞きしています。

病院ではない、生活の場であるせいりょう園で最期まで過ごすということは、特別な治療を行わず、老衰で亡くなっていくことを指します。では、老衰とはどのような状態をいうのでしょうか。私たちは、死に触れる機会が少なくなっています。それ故、人がどのような過程を経てどのように亡くなっていくかを知りません。特に「老衰」という状況がどのような状況であるかが分からないのです。私自身もこの仕事に就くまで人の死を目にすることはありませんでした。

「知らない」ということは、非常に不安なことです。どうしたら良いか分からない状況の中で救急搬送をしてしまうケースも多いのではないのでしょうか。

治るのか治らないものなのか、老衰の過程であるならば延命につながる場合もあり、ご本人・ご家族の望んでいない結果になる場合もあります。

私たちせいりょう園の職員は、これまでの看取りの経験から、人がどのようにして亡くなっていくかを知っています。「死」について看取りを行う専門職としてご本人・ご家族が後悔のないように、説明しています。まずは申込、そして入所時の契約の際には、せいりょう園でどのように過ごしどのように亡くなっていきたいかをお聞きした上で入所していただいています。

○本人が主役、家族と共に看取りを行う

・死=自己実現

せいりょう園では死は自己実現であると考えています。ご本人がどのように寿命を全うしたいのか、最後にして最も尊いニーズです。元気で健康なうちに出来るご本人のニーズに対しては、リハビリを行い成功体験として語られることが多いですが、終末期のニーズについては語られることが少ないように思います。生と死は切り離して考えるのではなく、ご本人の中では生活として連続しています。生活を支えるのが私たちの仕事であるならば、生活の中にある「死」についても、ご本人のニーズとして捉え、看取り介護計画に反映させ、自己実現出来るように支援する必要があると考えます。私たちが伴走者となり最期のゴールまで主役として過ごしていただいています。

・家族と共に看取りを行う

入所時には、看取り介護の同意書をいただいています。ここには看取り介護の理念・方針が記載されている他に、私たちが看取りの際にどのようなケアをさせていただくか、嘱託医の指示のもとにどのような治療ができるのか、について記載されています。どのご家族も望まれるのは、痛みや苦しみのない穏やかな最期ですが、老衰の過程で行う治療は、場合によってはご本人の体に負担を与えてしまいます。老衰は多臓器不全と呼ばれるだけあって内臓は機能しなくなり、食べた物や水分は排泄されにくく、特に水分点滴など行うと手足に浮腫となって現れ、ご本人の負担となります。ご家族が思い描いていることとギャップのないように、ターミナル期における治療の内容とリスクについて事前に説明を行っています。

説明の際に気をつけているのは、ケアの方針や理念、もしくは職員自身の価値観が押しつけにならないようにしていることです。あくまでもご本人の意思の尊重とご家族の意向に寄り添う形で接するようにしています。また、延命を望まない、と決めたご家族でもご本人の体が衰弱すると共に気持ちが揺れ動きます。その場合でもアドバイスはさせていただきますが、ご本人、ご家族の気持ちに寄り添いその都度意向の確認を行います。関わる職員の多くは自然な最期、人間らしい最期を看取ってきた経験があり、看取りの際のケアはもちろんのこと「自然な死」について事実を語る事が出来ます。何度も話し合いを行い、共に看取り介護が出来るように信頼関係を築くことを心がけています。

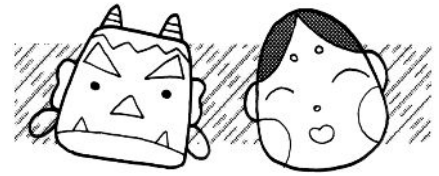
また、せいりょう園にてお葬式を執り行うことも出来ます。1階のフロアには和室があり、葬儀会社を選んでいただき祭壇を組み、参列することが出来ます。参列者はご家族、知人の他に職員スタッフ、そして終の棲家にて生活を共に過ごされた利用者の方々です。出棺の際にも皆でお見送りをさせていただきます。

感想

死は最期の自己実現であり、ターミナル期とはその準備期間になります。ほとんどの方は食事が摂り出来なくなり痩せて衰弱していきます。体の中にある老廃物や脂肪、必要のないプライドなど余分なものを削ぎ落とし、骨と皮の状態になります。そして他者に身を委ねるしかない状態になります。無条件で他者を信頼するその姿は、潔く美しく、昔の高僧が死を悟り自ら断食を行ったという尊厳のある即身成仏の姿のようにも思います。エンゼルケアをご家族と共に行い、尊厳のある自然な死を目の当たりにすると、ご家族の中にもある種の満足感、達成感があるように思います。葛藤しながらもご本人の生活に寄り添い、看取りを支えることができたからこそ実感できることなのだと思います。



仏教講話 [2月3日 (月)]



真宗大谷派 光念寺
本多 正尚 住職

デイサービス 谷澤 高明

新年明けましておめでとうございます。仏教講話は今月がスタートです。今年は『午年』、飛躍の年にしたいものです。お手元に年賀状が届いたことと思います。デイサービスでは年末、利用者さんに1枚ずつ真新しい年賀状を配りました。そして、誰かに出してくださいと話しました。日ごろ世話をかけているご家族に、子供さんに、お孫さんに、ご兄弟に、中にはご自身に出された方もありました。文字を書いたり、絵をかいたり、写真を切りはったり、最初は躊躇されていた皆さんも次第に楽しそうにされていました。又、今回は職員のアイデアで利用者さんオリジナルのカレンダーも作成しました。出来上がりには皆さん満足そうでした。今年もできることから挑戦していきたいと思います。年賀状といえば私は毎年版画を刷って、何か一言書き添えて出しています。ことしは『日々是好日』としました。これも当園で行っている書道クラブの皆さんが先日お手本にされていたのを思い出して拝借しました。『日々是好日』を（にちにちこれこうじつ）と読むことは知っていたのですが、本来の使われ方はよく知りませんでした。書道の作品を目にしてから調べてみたのですが、中国、唐時代の雲門文偃（ぶんえん）禅師の語といわれています。

多くの人は「今日も一日よい日でありますように」と願い、無事を願います。しかし現実はその願いの通りにはいかないで様々な問題が起き、悩ませられることばかりかもしれません。しかし、この一日は二度とない一日であり、かけがえの無い一時です。この一日を全身全霊で生きることができれば、まさに日々是好日となるのです。この「一瞬のところを大事にせよ」と云うことを教え示した言葉が『日々是好日』なのだそうです。私たちこそ、この心構えを忘れないで努めたいものです。

今年最初の講話には、真宗 大谷派 光念寺 本多正尚ご住職におこし頂いた。今回は年初ということもあったのか、話題は幅広くいろんなお話を伺った。その中でも強く心に残ったのは、浄土系の宗派が尊崇する阿弥陀如来像の手の形について。右手を胸の前に上げ、掌を正面に向けた形は人々の不安、心配を取り除くことを表していること。左手を下げ、掌を正面に向けた形は人々の願いを聞き入れ、望みを叶える事を表わしていることを教わった。阿弥陀如来さんは、つねに我々に対して『どんなことでも、大丈夫です。安心しなさいよ』。そして『だれでも、同じように救ってあげますよ』と言っておられますよ、ということだった。

そして、「ローソクと人生」についてのお話。

ローソクは自分を燃やして周りを明るくして生きていく。そして蠟が無くなると自らも消えていく。ご住職が話された「我々は何をもって、周りをどのように明るくして生きていったらいいんでしょうね」という言葉が心から離れなかった。いろいろ調べていて目に留まった言葉があった。九州在住の金子真介住職の御尊父の教えとあった。

人間のいのちは 一本のローソクに 火をつけたような ものである

燃えながら 照らしながら 刻々と減ってゆく

減ってゆくいのちを 減らぬようにすることは 誰にもできない

ただ どこをどのように 照らしてゆくか

これだけが 人間に与えられた たった一つの 自由である

大きな心で、人様の身になって考え、誰にでも同じように対応する。その度の「一瞬の
ころを大事にせよ」。これぞまさしく『日々是好日』の教えのように思えます。

ありがとうございました。本年もよろしくご支援、ご協力お願いいたします。

せいりょう園行事

2月1日にドルチェコーラスの皆さんに来ていただきました。



懐かしい童謡を大きな声で一緒に歌いました。

音楽療法の先生は言います。「自分の好きな音楽を見つけて、聴いて、
感じる事で、心身ともにリフレッシュ出来ます。音楽の力は偉大です。」

歌っている時は、皆さんの心が1つになり、

温かな空間に包まれました！！

歌い終わった後、自然と笑みがこぼれます。

心が豊かになるヒトトキでした！！

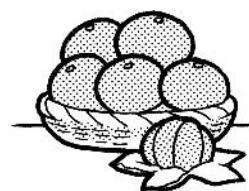
せいりょう園ボランティア募集

園芸・入居者とのふれ合い etc...

せいりょう園では様々なボランティアを募集しています。

興味ございましたら、お問い合わせをお願いします。

お待ちしております。



[問い合わせ]せいりょう園 TEL (079) 421-7156 担当：吉田 (ヨシタ)